鶴に乗る「費長房」

——本邦における漢画系画題受容の一側面——

中本　大

はじめに

文字テキストを追跡するだけでは確証を得られなかった事実が、絵画表象を辿ることで顕在化する例がある。一例を挙げると、『全相二十四孝詩選』（以下、全相本と呼称する）所収の孝子の一人に「楊香」がいる。全相本の記載は以下の通りである。①

楊香
深山逢白額　努力搏腥風
父子倶無恙　脱身饞口中
楊香其父為虎曳去香搏虎遂免於害。

全相本を俎上に載せ、考察することは本稿の趣旨ではない。ここで注目したいのは、文中には明記されていない主人公の孝子、楊香の性別である。龍谷大学学術情報センター蔵写本をはじめ、全相本とも関係の深い嵯峨本『二十四孝』や渋川版御伽草子などの挿絵を一覧しても、父を救わんと果敢にも虎口に飛び出す楊香の姿は、みずらに結った男童子の姿で描かれている。

『二十四孝』には楊香と名を同じくする「黄香」という孝子も採録されている。黄香の逸話が『東観漢記』や『純正蒙求』などの他書にも記されているとの指摘は既にあり、②黄香が男子であったことは広く認知されている。全相本を見る限り、楊香の性別にも疑念を抱く必然性はないように感じられる。しかし全相本とともに、室町期に受容された孝子説話集成『孝行録』所収「楊香跨虎」における楊香は、

楊香跨虎
楊香魯国人也、笄年、父入山中、被虎奮迅、欲傷其父、空手不執刀器、無以禦之、大叫相救、香認父声、匍匐奔走、踊跨虎背、執耳叫号、虎不能傷父、負香奔走、用而斃焉。
魯邦有女、字曰楊香、父遭虎逐、頓仆山岡、聞声赴救、直前自当、騎背掣耳、叫吁彼蒼、未遑噬搏載以奔忙、白額俄斃、翠娥無傷

「笄年」、すなわち成人式を迎えたばかりの「女」として描かれているのである。③そもそも「香」は雷車を牽いた阿香の例を持ち出すまでもなく、女性の名として理解しても一向差し支えない。しかし、全相本所収の孝子で実親への孝養に努めた人物はすべて男性であること、採録される唯一の女性は姑に仕えた唐夫人のみであることから、漠然とかつ曖昧に、その性別を敢えて問題化することなく、楊香は男子として理解されてきた。そしてその絵画的造型も狩野派の屏風や障壁画などの大画面作例のみならず、扇面画などにいたるまで、現存作例はほぼ全相本を踏襲する

かたちで継承されてきたのである。楊香像の受容に際し、『孝行録』は積極的に参照・援用されることなく、楊香を女性とする理解は主流とはなり得なかったのである。

　そうした中にあって注目すべき絵画作例の一つに「意精」の印を持つ「二十四孝図扇面画帖」がある。[4] ここでの楊香は、裙を身に着けた中国風の成人女性の姿で描かれている。詳しい検討は別稿に譲るものの、この「二十四孝図扇面画帖」自体は決して先例から著しく逸脱した解釈や特異な画面構成を誇るものではなく、楊香についても、樹木の配置や虎の姿態などは全相本の挿絵に基づく狩野派の伝統的な手法を用いている。その上で、依頼者の嗜好か、あるいは画家自身の判断に拠るのかは明確ではないものの、楊香の性別について疑念、または確信を抱いた人物がおり、その問題意識を積極的に提起する、つまりこの場合、全相本で明記されていない楊香の性別に関しては『孝行録』の記述に従うべきである、という判断のあったことが忖度されるのである。すなわち、全相本と『孝行録』を比較検討し、孝子像を追究する、という享受例のあったことが文字テキストからではなく、絵画表現の一作例から実証されたのであった。

　具体例はこれだけに留まらない。われわれが漠然と思い描いているものが絵画によって具象的に裏付けられ、逆に文章表現を牽引していく例はいくつかある。私は以前、文学的背景をもたない「鉄拐仙」という漢画系仙人の造型について、本邦五山禅林においては、元代の画家、顔輝作の蝦蟇仙人との対幅作例の画面構成要素を読み解くかたちで受容され、禅僧による画賛が量産されていったことで、次代の近世初期に近松や西鶴などにいたる日本独自の「鉄拐仙」像に結実していった様相を論じたことがある。[5]ある時代の共通概念、いわゆる常識が文字表現に先行して、絵画表現主導で確立していくおもしろさがそこに見出せる。本稿では如上の例とは多少色合いの異なる事例を検討し、本邦室町時代から近世初期にかけての日本独自の中国文化受容の様相を確認していくことを目的とする。

一

　「費長房」という仙人がいる。後漢の道士で、壺公に師事して壺中の天地に遊びつつ仙道を学び、後、故郷に帰る時、壺公から渡された杖を葛陂に投げ入れたところ、その杖が龍となって昇天したと伝えられる。また、桓景を弟子とし、九月九日の重陽の日に彼の一族を災厄から守った故事もよく知られている。中国明代万暦年間成立『列仙全伝』[6]を出典とする伝林羅山編『後素説』掲載の記述は以下の通りである。

壺公　費長房

費長房汝南人。曽為市掾。有老翁売薬于市。懸一壺於肆頭。及市罷、輒跳入壺中。市人莫之見。惟長房於楼上観之、異焉。因往再拝奉酒脯。翁曰、子明日更来。長房旦日果往。翁乃与倶入壺中。但見玉堂嚴麗、旨酒甘肴盈衍其中、共飲畢而出云云。翁乃断一青竹、度如長房、使懸之舎後。家人見之、長房也以為縊死、大小驚号、遂殯葬之。長房立其傍、而衆莫之見。於是遂随翁入深山云云。長房辞帰、翁与一竹杖曰、騎此任所之。傾刻至矣。至当以杖投葛陂中、又為作一符曰、以此主地上鬼神。長房乗杖、須臾来帰、自謂去家 適経旬日而已十余年矣。即以杖投陂、顧視則龍也。家人謂其久死、驚訝不信。長房曰、往日所葬、竹杖耳。乃発塚剖棺、杖猶存焉云云。桓景嘗学于長房。一日謂景曰、九月九日汝家有大災可作絳嚢盛茱萸繋臂上登高山、飲菊花酒、禍可消。景如其言、挙家登山、夕還見牛羊鶏犬皆暴

死焉。有像列仙伝

日本では次掲、『今昔物語集』巻第十第十二話「費長房夢習仙法至蓬莱返語第十二」に見られるように、飛行の術を体得した仙人として理解されていた。[7]

今昔、震旦ノ□ノ代ニ、費長房ト云フ人有ケリ。道ヲ行ケル間ニ、途中ニ枯レテ連タル死人ノ骨有リ。行キ違フ人ニ踏ラル。費長房、此レヲ見テ、哀ビノ心ヲ成シテ、此ノ骨ヲ取テ、道辺ヲ去ケテ、土ヲ深ク堀テ埋マシメツ。其ノ後、費長房ノ夢ニ、誰トモ知ラヌ人ノ、気色人ニモ似ヌ体ナル、来テ、費長房ニ語テ云ク、「我レ、死テ後、骸、道ノ中ニ有テ行キ違フ人ニ踏レツ。取リ隠スベキ人無キニ依テ、此ノ如ク踏レツルヲ歎キ悲ミ思ヒツル間、君、此ノ骸ヲ見テ哀ビノ心ヲ以テ埋ミ隠サシメ給ヘレバ、我レ、喜ビ思ヒ進ル事限リ無シ。我ガ実ノ魂ハ死テ後、天ニ生レテ楽ヲ受ル事限リ無シ。亦、骸ヲ護ラムガ為ニ、一ノ魂骸ノ辺ヲ去ラズシテ副ヒ居タリツル也。而ルニ、君ノカク埋ミ隠サシメ給ヘレバ、其ノ喜ビ申サムガ為ニ参ツル也。我レ、此ノ事ヲ報ジ申スベキ様無シ。但シ、我レ昔シ、生タリシ時、仙ノ法ヲ習テ行ヒキ。其ノ習ヒ、今ニ忘レズ。然レバ、其レヲ伝ヘ申サム」ト。費長房答テ云ク、「我レ、其ノ骸ヲ誰ト知ラズト云ヘドモ、道ニ有テ人ニ踏レシヲ哀ブガ故ニ埋ミ隠シテキ。而ルニ、今来テ仙ノ法ヲ伝ヘ教ヘム事、喜ビトス。速ニ我レ習フベシ」ト。然レバ、夢ノ内ニ此レヲ習フ。習ヒ取リツト見テ、夢覚ヌ。其ノ後、習ヒノ如ク行ズルニ、忽ニ身軽ク成テ、即チ虚空ニ飛ブニ障リ無シ。此レヨ□後、費長房、仙ト有ケリ。然レバ、自然ラ、道ノ辺ニ骸有テ恥カシク人ニ踏レ□バ埋ミ隠スベシ。其ノ魂必ズ喜ブ事也トナム語リ伝ヘタルトヤ。

中国の文献には簡単に見出せない「飛仙」としての費長房は、『曽我物語』流布本系諸本に至り、乗鶴の仙人としてのイメージが確立する。

大国に費長房といふものあり、仙術をならひえてくらき所もなかりしが、いまだ天にあがるじゆつをばならはずして、むなしく凡夫にまじはりありきけり。ある時商用の事ありて、長安のいちにいでて商人にともなひしに、ある老人こしにつぼをつけてこの市にまじはりけり。知音は知ることはりにて、此ものたゞ人ならずと目をはなさでみるに、此老人かたはらにゆき、こしなるつぼをおろし、其つぼに出入しけり。さればこそ仙人なれと思ひて、其人のゆくにしたがつて、すなはちかの仙人の家にいたりて三年までぞつかへける。あるとき老人のいはく、『なんぢいかなる心ざしあつて、三とせの間一こと葉もたがへず我につかへけるぞや』。ひちやうばうきゝて、『われ仙術をならふといへども、いまだ天にあがる事をしらず。老人のつぼに出入し給ふことをおしへ給へ』といひければ、『やすき事なり、我袖にとりつけ』といふ。すなはちとりつきければ、二人ともにかのつぼのうちへとびいりぬ。此つぼのうちにめでたき世界あり。月日のひかりはそらにかゞやき、四方に四季のいろをあらはし、百二十丈の宮殿楼閣あり、天には聖衆まひあそび、鳧雁鴛鴦こゑやはらかなり。いけには弘誓の舟をうかべり。よくよく見めぐりていまは出んといへば、老人たけのつえをあたへて『これをつきて出よ』といふ。すなはちつくと思へばときのまにおしみつといふ所にいたりぬ。此つえをすてければすなはち龍になりて天にあがりぬ。ひちやうばうは鶴にのりて天にあがりけり。是も功をつみけるゆへなり。

『三年までこそなくともまちてみよ』とぞ申ける。
（『曽我物語（王堂本）』「すまひの事付ひちやうばうが事」）[8]

こうした理解は『曽我物語』の影響を強くうけた説経節にも継承され、

御台この由きこしめし、「なう、いかに太夫殿、これはたとへでなけれども、費長房や丁令威は、鶴の羽交に宿を召す、達磨尊者は芦の葉に召す、旅は心、世は情け。
（『さんせう太夫』）[9]

のように、近世初頭までには、費長房と丁令威とを鶴に配される代表的仙人と見る常套表現が確立していった。

如上、飛仙だけでなく「乗鶴」の設定も漢籍には見出せず、本邦独自の理解であったと考えられる。しかし、その背後には三国時代、蜀の費褘（文偉）が登仙し、鶴に乗って黄鶴楼に遊んだ故事を同姓の費長房と混同した可能性も想定され、考慮する必要がある。中国宋代の地誌『太平寰宇記』所収の逸話である。

黄鶴樓在縣西二百八十歩。昔費文禕（偉カ※稿者注）登僊、毎乗黄鶴於此樓憩駕、故號爲黄鶴樓。
（『太平寰宇記』鄂州・江夏縣）[10]

他方、こうした理解が本邦で深められた要因の一つとして、絵画が果たした役割を考慮する必要がある。近世初期成立、本邦画題集成の嚆矢、狩野一渓編『後素集』でも「神仙」部所収「葛陂図」項で、[11]

葛陂図
賓長房壺公ヲ師トス、葛陂ト云所ノ江水にツヘヲナクレハツヘ龍ニ成体ナリ、後ニ鶴ニノル、唐人。

費長房の逸話に言及した後、傍線部、典拠を示すことなく補足的に「後、鶴ニノル」と記すことからも、テキストには拠らない「乗鶴の仙人」としての画像的イメージが確立していたことが付度されるのである。

二

鶴に乗る費長房の図像的表象は室町時代後期、永禄年間にはすでに定着していたと考えられる。その傍証となるのが興福寺別当、光明院実暁の著録『習見聴諺集』（『実暁記』）巻一所収、「聞見雑記二十條」の次の記述である。

一　仙人
鶴ニ乗スルハ　ヒチャウ　　鴨ニ乗スルハ　鳧舄（フセキ）
鯉ニ乗スルハ　キンカウ　　浮木ニノルハ　チャウハク
剣ニ乗スルハ　リヨトウヒン

後に続く記事や、「琴高」や「呂洞賓」など室町水墨画の現存作例にも、その画題が見出せる人物が挙げられていることを勘案しても、図像に関する記述の集成と見て間違いあるまい。[12] その中の傍線部、乗鶴の仙人は「ヒチャウ（費長）」であることが記されているのである。

仙人図や道士図には亀・魚・鹿・牛・鳳凰など、仙禽（動物）の配されるものが少なくなく、中でも鶴に乗る仙人の画題にはその背景となる多

くの故事が想定される。画題確定が困難を極める所以である。そうした中にあって比較的比定しやすいのは王子喬であろう。

王子喬は周の霊王の太子晋。笙を得意とし、よく鳳凰の鳴声を模したという。後に道士浮丘公に学び、嵩高山に上り、三十余年後に白鶴に乗り昇天したといわれる。『三才図会』・『仙仏奇踪』・『列仙全伝』などの諸書にその逸話が採録されている。後漢の王喬は王子喬の再誕ともされた（『後漢書』巻七十二・方術列伝）、王子とも称される。『後素説』所収の記載は以下の通りである。

王子喬

王子喬周霊王太子晋也、好吹笙作鳳鳴、遊伊洛之間、道人浮丘公接、晋上嵩山三十余年後見栢良謂曰、可告我家七月七日待我於緱山頭、至期果乗白鶴、駐山頭可望不可到俯首、謝時人、数日方去後立祠緱氏山下。有像列仙伝

乗鶴仙人の代表例であり、その画題としての摂取は、狩野派合作南禅寺大方丈群仙図障壁画をはじめ、本邦でも盛んに行われた。鶴の背に乗り、笙を手にした王子喬のイメージは明瞭、他の仙人と混同される可能性は低いと思われる。しかしそれは図像表現のみを対象とした場合であり、「王子喬」と「王喬」が文章表現において判然と区別されていたか否かは不明である。先に挙げた『習見聴諺集』に見える「鴨ニ乗スルハ　鳧舃」とは実は王喬の故事であり、『捜神記』に見える次の逸話に基づいている。

漢明帝時、尚書郎河東王喬為鄴令。喬有神術、毎月朔、嘗自縣詣臺。帝怪其来数而不見車騎、密令太史候望之。言「其臨至時、輒有雙鳧、従東南飛来」。因伏伺、見鳧、挙羅張之、但得一雙舃。使尚書識視、四年中所賜尚書官屬履也。（『捜神記』巻一）[13]

傍線部、「鳧」は鳥のマガモ、「舃」は履（くつ）である。その二つの語彙を繋ぎ合わせてあたかも人名のように示したのは、実暁の認識に誤りがあったのか、往時、王喬の別称として通用していたのか定かではないものの、依拠資料の「鳥に化して飛来した」という文脈を「鴨に乗って飛行した」と誤解したことは間違いないのである。そこには「王喬」を「王子喬」と混同した可能性も考えられるのである。

三

本邦において、鳥に「化した」仙人が、鳥に「乗る」仙人と誤認された例に、先掲、『さんせう太夫』で費長房とともにその名を挙げられた丁令威がいる。

丁令威は遼東の道士。仙道を学んだ後、鶴に化して故郷の城郭の柱（華表）に止まったところ、里人に射られそうになり、「鳥あり、鳥あり、丁令威。家を去る千年、今始めて帰る。城廓故の如くにして、人民非なり。なんぞ仙を学ばざるか、塚累々たり」と歌い飛び去ったという（『捜神後記』等）。『仙仏奇踪』や『列仙全伝』などに所収される逸話である。日本では、「鶴に化した」ではなく、「鶴に乗った」仙人として広く受容されている。これも中国では確認できない本邦独自の理解かと思われるものの、考慮すべき視点がある。図像の問題である。

華表の柱の上に留まる鶴を描く『列仙全伝』の挿絵とは異なり、『仙仏奇踪』では鶴を左側に配した丁令威本人の姿を描いている。一見して鍾愛の鶴を慈しむような姿――西湖孤山に隠棲した林和靖のような――で

ある。中国明代において既に文章表現から逸脱し、乗鶴の仙人として、その図像的イメージが変容していた可能性も考えられるのである。『後素集』でも「丁令威」の項目を挙げ、「丁令威鶴ニノリ、遼東鳥井上来体ナリ。」（「神仙」部）と記し、乗鶴の仙人との理解を示している。単独の画題としては現存作例も多くないものの、群仙図のなかに配される乗鶴の仙人で、笙を吹いていない場合、費長房とならんで丁令威に比定すべき蓋然性も考慮しなければならないのである。

　さて、「乗鶴」を鍵に費長房の周辺を追跡する際、興味深い説を示すものに『絵本宝鑑』がある。元禄元（一六八八）年、上方の絵師、長谷川等雲が絵を担当した『絵本宝鑑』は、近世前半を代表する画本で、後世の絵手本類にも大きな影響を及ぼした一書である。その「費長房」の項目は以下の通りである。⑭

四十七　費長房

費長房は後漢の代の人なり仙人にあふて道を求めんといふ。仙人おもへらく、費長房道をまなばゞ、今のごとく家にあり俗に交りては成べからず。山林にいらずんばなにとして修行を得ん、費長房そのまゝに家を出ば、家人うれへ悲しむべしとおもひ、ひとつの謀をぞなしける。ひとつの青竹を費長房が身の尺にくらべてきり、費長房に渡し、これをなんじが舎のうしろにかけよといふ。長房すなはち持て帰り舎の後に懸をき我は仙人の所にいたり、道を聞ゐたり。諸内の奴婢とも彼かけ置し青竹を費長房縊死したりと見てなけき悲しみ、野辺の葬をぞしたりける。斯りし后は費長房おもひのまゝに深山にかくれ居て、仙術をならひけるに、仙人をしへて群れる虎のうちへつれゆき、独処しむれども、長房すこしもをそれず、又長房昼寝せしとき、大石を長房がむねのうへとおぼしき柱にゆひつけをきしかば、長房をどろきあぶなき心地せしに多の蛇来りて大石をつりける縄を齧しかば石すでに落んとすれ共、長房すこしも脇へよらず、そのとき仙人誠に汝は仙術をならひ得べしさりながら、これを食してみよと糞をぞあたへける。長房これを見るに、糞の中に虫わきて、其臭きこと堪がたし、なかなか食する事あたはずとて、忽ちこれをすてければ、仙人わらつて曰、なんじ今すこし足ず恨らくは道をえんこと成まじと有しかば、長房これに気を屈して辞して帰らんとす。仙人さらばせんかたなし、これに乗りて帰れとて竹杖をあたへ、宿にかへらば、かならず陂にすてよといふ。又ひとつの符をつくり、これを与へて曰、是を用ひず地上の鬼神を心まゝすべしとありしかば、長房かたしけなしと立わかれ我宿はいづくのそこともしらねども、をしへにまかせかの竹にうちのり、向ひたる方へいそげば、夢のごとくに我古郷にぞ着にける。家人奴婢驚きあやしみけるも理なり、旬ばかりのうちとおもひしが、すでに十数年ぞ過たりける、扨彼杖を陂にすてければ、龍となり天へぞ上りける、又ひとつの符をもつて人の疾にかくれば忽ち治り百鬼祟をなすに、此符にて打たゝけば、忽ち鬼神にげさりけり、そのゝちいかゝしたりけん、彼符を失ひしかば、今まで鞭苦しめられける、衆の鬼神等終に長房を把殺しけると也。又考るに右の仙人は壺公といへり、市に在て薬を売しに、空壺を肆の軒に懸て、日暮るれば壺の中に飛いる、費長房楼上より是を見て、其常の人にあらざる事をしれり、すなはち行て見ゆ、仙人の曰、費長房此壺中に入べしと、長房飛んで入、内大に広くして、五色にて彩たる重門あり、その門をいるに閣道あり、楼観皆金銀珠玉を鏤めけり、瑶の階をのぼれば、仙人儼然として在、左右の侍者数十人つゝしんで侍り、費長房其故をとふ、仙人のいはく、我上界の仙人なり、謫せられて暫人間に寓る耳と云々、亦長房鶴にの

りけることは、続捜神記に、遼東の花表に鶴あり、人のごとく言て曰、鳥あり鳥あり丁令威、仙をまなんで千年、今始て帰る、城廓は是にして、人民は非なり、何ぞ仙を学ばざるか、家塚累々と云々、これよりして鶴にのれる形を写す、亦斉諧志にいはく、黄鶴山は仙人子安黄鶴に乗て此上を過、黄鶴楼ありと、然ば子安といふ仙人も鶴にのりたるなり、又丁令威とは費長房がことなり。

興味深い記述である。前半、意訳を交えながら費長房の逸話を詳細に語り、諸仙伝に見られる重陽の由来譚には言及することなく、傍線部、乗鶴の故事に転じるのである。注目すべきはその内容で、前掲、丁令威の逸話を引用し、『南齊書』「州郡志」に典拠をもつ「子安」なる仙人の黄鶴楼伝承に言及しつつも[15]、費長房は丁令威と同一人物である、という結論を展開するのである。

『絵本宝鑑』については中島貴奈氏が池水で耳を洗ったはずの許由が瀧で耳を洗った、と改変されていることに注目し、「絵」という視覚的なものに置き換える際の作為が感じられておもしろい」とされているが[16]、更に踏み込めば、許由の場合、先行する代表的絵画作例――もちろん瀧に耳をあてようとする構図で著名な狩野永徳筆「許由巣父図」（東京国立博物館所蔵）――があり、その先例を権威付けるための必然性から起筆、解説されていると考えるべきであろう。その意味では『絵本宝鑑』は先行する絵画作品を文章表現が追いかけた、まさに好例と言えるのである。ならば、費長房の場合も先行する絵画表象製作の必然性を意義付けるため、その証左となる内容をもつ文章が用意されたとは考えられないであろうか。費長房と丁令威とを同一視する『絵本宝鑑』の記載がどの程度の影響力を誇ったかは不明ではあるものの、正徳二（一七一二）年刊行の画論書『画筌』には費長房の項目が無く、丁令威を鶴に乗る姿で描いていることを考えると、両者を同一人物と見做す理解が継承されていった可能性も全くなかったとは言い切れないのである。

おわりに

乗鶴の仙人としての費長房のイメージは、費長房を飛仙とする本邦の理解と、室町期に至り乗鶴仙人の図像が、必ずしもその物語的背景を伴うことなく数多く齎来され、それに倣って多くの仙人画像が描かれていったことが交錯し、確立したものと考えられる。そこには数多くの類似する図像を前にした画人や作家の困惑が読み取れる一方、類似するものの共通項を見出し、それを相互に関連付けながら新たな世界観を導こうとする進取の姿勢が看取できることも事実である。圧倒的に少ない絵画の現存作例を前に、こうしたイメージの変容を追跡することは決して簡単ではないものの、往時、現在の我々が考え、理解する以上に文章表現と絵画表象が交感していることは忘れてはならないであろう。近世に夥しく出版される絵手本はまさにそれを解き明かす糸口なのであり、そうした受容の源泉に漢画系画題の背景を追求せねばならない責務のあった五山禅林の学僧の努力があったとするならば、少なくとも画題を鍵に考察する場合、五山禅林で培われた文化は確実に次代、近世の画壇や文壇へと継承されていると考えられるのである。

注

① 龍谷大学学術情報センター所蔵写本に拠る。

② 徳田進『孝子説話集の研究』（井上書房・一九六三〜一九六四）など参照。

③ 京都大学附属図書館平松文庫所蔵『二十四孝伝并賛』（近世初期写本）所収本文に拠る。

④ 和泉市久保惣記念美術館平成二年度特別展図録「扇絵—日本・中国・朝鮮半島—」所収図版に拠る。同書の解説に拠ると、意精は狩野元信周辺の画人と見られるものの、「中央画壇から離れたところで活動していた」こと、当該作品については「版本などの粉本を忠実に描写したこと」などが指摘されている。

⑤ 拙稿「「鉄枴仙」像の受容と定着」（伊井春樹編『古代中世文学研究論集』第一集・一九九六・和泉書院）参照

⑥ 名古屋市立図書館蓬左文庫所蔵写本に拠る。訓点等は省略した。『後素説』については、拙稿「『後素説』について」で詳しく論じている（伊井春樹編『古代中世文学研究論集』第三集・二〇〇一・和泉書院）。参照されたい。

⑦ 京都大学附属図書館所蔵鈴鹿家旧蔵本に拠る。

⑧ 岩波文庫本に拠る。なお、稿中記すように、この記事は真字本や大石寺本・大山寺本などには見出せないものであり、別に検討を要するものの、本稿では室町時代末から近世初期にかけての事象を中心に論じているため、詳細については省略する。

⑨ 新潮日本古典集成『説経集』所収本文に拠る。なお、類似の表現は「をぐり」などの他の作品にも見える。

⑩ 国立公文書館内閣文庫所蔵本に拠る。『太平寰宇記』は『詩学大成抄』などにもその名が見え、普及のほどは詳らかではないものの、室町時代、禅林を中心に享受されていたことが知られる。なお、黄鶴楼の故事については、注⑮に見える黄子安をはじめ人物比定に多くの説が示されている。ここでその詳細を言及することはしないものの、先学の学恩に感謝したい。

⑪ 東北大学附属図書館狩野文庫所蔵写本に拠る。

⑫ 前田育徳会尊経閣文庫蔵写本に拠る。この記事に続けて「一唐人　菊ヲ愛スルハ陶エンメイ　梅ヲ愛スルハ林和靖　瀧ヲ愛スルハ梨白　月ヲ愛スルハ王子猷　柳ヲ愛スルハ柳夏桂」とあり、画題に関係する記述の集成であることは間違いあるまい。これらの記述は京都のみならず、南都絵所の絵師も漢画系画題に興味を示していたことの傍証ともなるだろう。

⑬ 『学津討原』所収本文に拠る。

⑭ 信多純一氏所蔵本に拠る。

⑮ 「子安」については、室町時代物語「鶴草子」に黄鶴楼とは関係しない別の説話に言及する諸本のあることが報告されている（狩野博幸「土佐光信筆　鶴草子について」（『学叢』第5号・一九八三・三・京都国立博物館）。「子安」の名が近世初期の画壇において、鶴に関わる仙人として興味を抱かれていたことが確認されるのである。

⑯ 「『幼学指南抄』と類書—中国文化受容の一つのかたち—」（『京都大学附属図書館報　静修』第三十九巻一号・二〇〇二・五）参照。

付記

本稿は立命館大学21世紀COEプログラム「京都アート・エンタテインメント創成研究」プロジェクト『WEB版画題事典』構築のための総合的研究」の成果の一つである。

（本学文学部助教授）